

第7回 日本NP学会学術集会が 開催される

本誌編集室

第7回日本NP学会学術集会が、2021年11月19日（金）～21日（日）の3日間にわたり、オンライン上で開催された〔オンデマンド配信は12月12日（日）まで〕。

大会長は本田和也氏（独立行政法人国立病院機構 崎医療センター）で、メインテーマは「Collaboration——診療看護師（NP）の真価を問い、新たな価値を創造する」。従来の学術集会に比べ、より「実践」や他領域との連携に踏み込んだ発表・報告が多く、現場で奮闘する多くの診療看護師（NP）の“顔が見える”臨場感あふれるオンライン大会となった。参加者は1000名を超え、盛況にて幕を閉じた。

地域医療における診療看護師（NP）

シンポジウム3「地域医療における Collaboration」では、診療所で活躍する診療看護師（NP）や、離島病院の診療局や地域ケア科で活動する診療看護師（NP）らからの活動報告、ビジョン共有や提言等があり、地域における着実な実践経験の蓄積を垣間見ることができた。

矢尾知恵子氏（むさしの丘ファミリークリニック）は、コロナ禍での発熱外来で診療看護師（NP）として初期診療に当たった経験を発表。後藤智美氏（生協浮間診療所）からは、「医師の対応を望む患者もいるのでは？」との質問に、「まず、どのくらい医療・医師に期待をしているのかからアセスメントする必要がある」と、実践者ならではのスキルが語られた。

トリアージ機能の可能性

藤野泰平氏（株式会社デザインケアみんなのかかりつけ訪問看護ステーション代表取締役）は、いまだ偏在する日本の医療資源について触れ、社会課題解決ビジネスとしての訪問看護事業と、地域で活躍する訪問看護師、診療看護師（NP）への期待を熱く語った。同社では夜間コールセンター

を設置し、初期対応トリアージスタッフと出動スタッフの分業を図っている。「知識と技術は物理的距離を超える」とし、遠隔地やへき地であっても、専門資格を有するリソースナースが医療資源の一端を担う可能性を探る。

診療看護師（NP）のラジオ

現地開催の予定を急遽、オンライン開催のみに変更した本集会だったが、動画での告知やオンライン上での事前交流、ディスカッション促進の仕掛けなど、運営スタッフらによる工夫も見られた。

中でも、「診療看護師（NP）のラジオ」のコーナーでは、ラジオ番組仕立てで複数回にわたりゲストを招き、大会参加者予定者からの素朴な質問に答えるという試みも行われた。診療看護師（NP）だけでなく、組織の管理者やいち看護師など関心を持つ多くの人を受け入れる学会の姿勢を感じさせた。

次回第8回は、2022年11月11日（金）～13日（日）、藤田医科大学（愛知県名古屋市）にて開催予定。大会長は酒井博崇氏（藤田医科大学）が務める。

